

メキシコ系アメリカ人：越境した生活者

著者	黒田 悦子
雑誌名	国立民族学博物館研究叢書
巻	2
発行年	2000-03-28
URL	http://doi.org/10.15021/00000791

『第五巻』チカノ小説

一・チカノ小説の魅力

チカノ小説とはメキシコ系アメリカ人の生み出した小説のことで、特に一九六〇年代からこの人々が自らの存在意識に目覚めてからつくりだした作品のことをいう。

それ以前にも、メキシコ系の人々の書いた小説はあったが、それは「メキシコ物」としてアメリカ合衆国では知られ、植民地時代の文学的伝統をひきずった作品やフォークロリックなものが多かった。これらと違って、チカノ小説が興味深いのは、メキシコ系の人々の合衆国での苦難や適応、民族的目覚めと抵抗の試みなどが直に伝わってくるからである。しかし、それがために、これらの小説にはこの人々をめぐる個性が多すぎ、一般のアメリカ人の間に読者をえにくい。

アメリカ合衆国の社会に深く根ざしたアフリカン・アメリカン（黒人）の小説さえ、リチャード・ライト、ジェームズ・ボールドウィン、アリス・ウォーカー、トニー・モリスンなどの進出があつてこそ、合衆国と世界で読まれるようになった。ネイティヴ・アメリカンの小説もスコット・モマディ、L・M・シルコなどの作品に見られるよ

うな先住民の精神世界の表現があつてこそ、アメリカ人に受容されてきた。これら二民族集団の作品に比べて、メキシコ系アメリカ人の小説のアメリカ社会における受容度は低い。

その原因はまず関係する出版社が弱小であることによる。一九七〇年代にチカノ運動が余熱を保っていた頃には、いくつかの小説は大手の出版社のペーパーバックとして出版された。しかし、それ以降のほとんどのチカノ小説は、カリフォルニア、アリゾナ、ニューメキシコ、テキサス州のチカノ組織や個人経営の小出版社が出版しており、広告をでることは少なく、入手しにくい。私は合衆国南西部とメキシコに出かけた折に店頭で求めたり、日本から注文したりして、今までに一九冊だけ入手している。わずかの冊数であるが、主な著作物は含まれているので、その概要をお伝えし、魅力の一端を紹介したいと思う。

これらの小説を読んでみると、実にこの人々に特有の経験についての語りが多いことが分かる。エスニック小説とは移住した国での「生き残り」^{〔1〕}の経験を描いたものであるから、当然のことであろう。メキシコ系の小説の場合、自分の出身地メキシコ、それもほとんどは貧しい農村生活、メキシコ革命のこと、アメリカ合衆国への越境、新天地での苦難とその克服が小説のなかで詳細に語られる〔Galarza 1971, Vasquez 1970, Villarreal 1959, 1974, Villaseñor, E. 1973, Villaseñor, V. 1991〕。

メキシコでの生活は貧しいものであつても、やや牧歌風に描かれ、いささか冗長であり、どの読者もが各ページを楽しめるとは限らない。メキシコ革命に関わる部分は事実としては興味深いが、メキシコ本国に「革命物」とされるファン・ルルフォ、カルロス・フエンテスなどの名著がたくさんあるため、これらに比べてチカノ小説の語りは平凡なものとなつてしまふ。しかし、越境以降のアメリカでの生活を語った部分はチカノに特有のものであり、迫力がある。初期の作品にみられる主人公のアメリカ社会への同化であれ〔Villarreal 1974〕、六〇年代以降の主人公の民族的なるものへの目覚めであれ、物語に説得力がある。

これらの小説のうち、オスカー・Z・アコスタの『キブリ族の反乱』[Acosta 1973]は一九六九年末からはじまったイースト・ロサンゼルスのチカノのデモの実録であり、個人から友人、隣人、そして群衆へとふくれあがっていくチカノ・スタイルの集団形成がよく描かれている。人々の独特の言葉遣い、服装、当時の熱気が伝わってくる。主人公は著者のアコスタであり、法律家の彼が農業労働者のリーダーであるセサル・チャベスをデラーノに訪ねて行く場面は印象的な部分で、最盛期のチャベスの姿がうかがえる。六〇年代のチカノ運動のことは今や過去のものととなり、想像するのが難しいほどになったが、この小説を読むと臨場感がでてくる。この迫力のためか、この小説はニューヨークの大手のバンタム・ブックスから出版されている。

同じくチカノ運動盛時の雰囲気伝えるものとしてミゲル・メンデスの『アストランの巡礼』[Mendez 1974]がある。この本はバークレーの小さなチカノ出版社からだされたが、スペイン語で書かれているので、一九八九年にはメキシコの大手ERRAからも出版された。この本の序文に、著者メンデスは、自分達の文学表現はスペイン語でしかありえない、と記している。なるほど関連で荒削りなスペイン語で国境地帯の労働者の生活が軽快に描かれている。普通の人がなかなか近づきにくいインベリアル・ヴァレーの労働者の姿を伝えてくれるのも、この小説の妙味である。しかし、このスペイン語は私にはかなり難しい。この著者の目的はメキシコ本国の人々に語りかけて、国境によって分断された北の同胞の生活とそのメキシコ魂を伝えようとしているように思える。

右の二書と違った魅力を持ったものにロン・アリアスの『タマスンチャレへの道』[Arias 1975]がある。著者はジャーナリストで、書き慣れた簡潔な文章と会話でこの短い小説をまとめている。主人公はロサンゼルスのメキシコ系住民の多いバリオ（町の小区画）に住む八〇歳ほどの老人で、死を直前にして夢のなかで時空を越えて旅をし、意識が消えていく寸前までの姿が語られる。この技法をラテンアメリカ文学の「マジカル・リアリズム」の系列につらなるものとして高く評価する論者が多いが、ガルシア・マルケスの語りのような圧倒的迫力はありません。

読み続けることに困難を覚える読者も少なくはないだろう。

右に見たようなチカノ小説と一味違うのがニューメキシコ州から出るイスパノ（スペイン系アメリカ人）の作品である。これらは今では広義のチカノ小説に入っているが、ニューメキシコ州やコロラド州南部に根ざしたスペイン系の人々の文学的営為は一般に「ニューメキシコ物」としてアメリカ人に知られている。同州はネイティヴ・アメリカン、スペイン系の人々、アングロという三民族の文化が共存するところであり、その独特の地方文化はアメリカ人に愛好されている。

この地方の美しい山河、アドベの家、料理、治療儀礼、人生儀礼、祝祭、ベニテンテ（四旬節の悔悟者）の儀礼、民話などを回想して書かれた物語がサビネ・R・ウリバリ [Uribari 1971, 1977] やオルランド・ロメロ [Romero 1976] によって生み出されてきた。

この地のスペイン系の人々の起源は一六世紀の「征服者」にあるとする人はナッシュ・カンデラリアのようにルーツ探しの小説を書いた [Candelaria 1977]。主人公はニューメキシコ州出身であるが、今はカリフォルニアに住み、自分のルーツはメキシコにあると考えメキシコへかけるが、越えがたい違和感を覚える。そこで、スペインにまで旅するが、ここで客死する。一種の幻滅の物語であるが、エスニックなアイデンティティなるものは時空の差によって生じることを示す物語ともいえる。

カンデラリアの物語は例外的で、ニューメキシコ州出身者はあくまでも同州の民俗文化にこだわる。ニューメキシコの州都アルバカーキ市の東に位置する町サンタ・ロサ出身のルドルフ・アナヤはその例である。チカノ作家としては珍しく、彼はニューメキシコ州立大学の英文科に職をえたため、定収入をバックにしてなにかば職業的な作家活動を続けられたので、次々と著作を今までに出版している。

彼の処女作は『ウルティマ、僕に大地の教えを』 [Anaya 1972, アナヤ 1996] で、小村の生活が子供の目を通し

て美しく描かれている。最後の章がウルティマの死で終わるのは小村の生活の喪失を象徴しているのだろう。

次の作品『アストランの心』[Anaya 1976]は小村を離れて州都アルバカーキ市のバリオに住みつき、鉄道労働者となった家族の物語である。ここでは小村の生活にあつた価値観は崩れていく。父親の地位は低くなり、パート・タイマーとして収入をえる母は強くなる。両親の子どもへの命令は守られなくなる。全体として家族全員がアイデンティティ・クライシスに陥る。この時、父親は老いた占い師に助けられ、心の安定をとり戻し、夢のなかで山に登り、死を身近に覚えるが、その後、アストラン（チカノ揺籃の地）の心に触れ、蘇生し、バリオに戻ってくる。そして、労働者の山猫ストのリーダーとして立ち、仲間の救済に身を挺する。その時点から、彼と家族の再生がはじまり、現状への適応が可能となる。

おそらく、右の物語は一九三〇年代より都市に移住せざるをえなかった多くの人々の出会った苦境に対する一つの救済の物語ともとれよう。

同じようなテーマは『トルトゥーガ』[Anaya 1979, マナヤ 1997]でも追求される。北部の小村から都市の医療施設に送られた半身まひの青年は絶望の底にいたが、同じような障害を持つ仲間とつき合い、友情を覚えはじめる。そして、ある夜、仲間と一緒に窓から朝夕見える山に登る夢を見る。これが癒しとなって、心身ともに回復し、青年は北部の村へ戻っていく。

この小説の後、アナヤは民話の再話 [Anaya 1980] と中国への旅行記 [Anaya 1986] を発表する。

次に出版された『アルバカーキ』[Anaya 1992, マナヤ 1998]（この都市名は現在のスペリングではなく、植民地時代のアルブルケルケと綴つてある）は軽快な筆致の社会小説である。同市のリオ・グランデ河沿いに住むイスパノの青年が市長選をめぐるスキャンダルに巻きこまれながらも、父親にめぐり合い、同じイスパノの女友達もえて元気に生きていく青春物語である。物語そのものは単純であるが、この小説が面白く読めるのはアルバカーキ

市の生活模様が生きいきと描かれているからであろう。

一九九五―一九六年にはアナヤは探偵小説二作を発表し、愛読者を喜ばせた。イスパノの探偵ソニー・バカが登場し、カルト集団と闘ったり [Anaya 1995]、バルーン大会にひそむ陰謀を暴いていくことと [Anaya 1996]、アルバカーキ市を例にしたニューメキシコ州の政治、開発問題などが浮彫りにされている。

「ニューメキシコ物」はアナヤをはじめとするイスパノの小説だけでは完結しない。まず、ネイティヴ・アメリカンの小説がある。ラグーナ・プエブロ・インディアンの血を引くシリコの小説はそれである。また白人でありながら、タオス・インディアンを描いたフランク・ウォーターズの一連のインディアン物がある。さらに、ニューメキシコ大学で人類学を学びミステリー作家となったトニー・ヒラーマンの描くナバホの探偵小説は全米のみならず日本でも読まれている。そして、全米に知名度のある小説家ジョン・ニコルズは北部の町の水争いと開発をテーマにして、『豆畑戦争』『魔法の山』『涅槃の青』 [Nichols 1974, 1978, 1981] を出版し、ニューメキシコ小説を全国に普及させている。『豆畑戦争』 (*Millagro Beanfield War*) はロバート・レッドフォード監督により映画化され、「ミラグロ」(ユニヴァーサル社 一九八八年) と題され、日本でも上映された。

この例が示すように、チカノ文学に他のアメリカ文学が加わってこそ、ローカル文学の面白さが増えるのではないだろうか。

二、女性チカノ小説の登場

チカノ小説は一九六〇年代から世にはじめたが、女性のチカノ小説(女性形でチカナと書くべきかもしれない)が人目につきはじめたのは一九八〇―一九九〇年代である。この頃、メキシコ系アメリカ人の女性たちで移民

二世以降の世代となり高等教育をうけた人が増え、この人たちに書く余裕が生まれたからである。同時に、州政府や連邦政府のアフーマティヴ・アクション（差別是正策）により執筆や出版のための助成金が与えられたり、大手の出版社も多文化主義の流れに乗り女性チカノ小説を採用するようになったからである。そして大学のチカノ・ラティノ研究プログラムに在籍する女性チカノ研究者により、いち早くこのジャンルの小説、詩、その他の作品の批評が出版されていることも注目に値する [Herrera-Sobek 1985, Herrera-Sobek and Viramontes 1996]。

とはいえ、これらの小説を入手するのは必ずしも容易ではない。一五冊ほど注文して、私が入手できたのはわずか八冊である。出版部数が少なくて早々と絶版となったものもあるし、出版元が小さすぎて国際的な販売ルートに乗らない作品もあるからである。

私が手にした作品は例として少ないとはいえ、一定の傾向性を示している。前節で紹介したチカノ小説にくらべて、女性チカノ小説はより自己肯定的でボーダレスである。チカノ小説の多くはメキシコに未だ直結しているとの感を与えたが、女性作家の存在の「位置」はすでにアメリカ合衆国にあり、ルーツとしてのメキシコ文化は学び観賞し創作活動の源泉として活用されており、作家の心は二つの世界を自由に動くのである。

シカゴ生まれのサンドラ・シスネロスはマンゴー通りと名づけられたバリオの生活を描くと軽く流れるが [Cisneros 1983, シスネロス 1996a]、テキサス州サン・アントニオ（現在はここに在住）に題材した短編集 [Cisneros 1991, シスネロス 1996b] では国境沿いの地でみられるメキシコ系の人々の生活を理解と共感をこめて描いており、迫力がある。同短編集中の秀作が「サバタの目」であろう。私たちが数々の白黒写真で目にするエミリアノ・サバタの目は異様なほどの光を帯び、革命家としての情熱と人間としての求心力のほどをうかがわせる。このサバタを、シスネロスはサバタの愛人の語りの形をとって描いている。

それと同じように、メキシコに関わるイメージがアメリカ合衆国に生きるメキシコ系の人々にとって豊饒なる文

化的喚起力を与えてくれることをパット・モラは明らかにしてくる。メキシコ北部のチワワ州に生まれ、合衆国テキサス州の国境の町エル・パソに育ったモラはネバントラ（ナワ語で中間の意味）に住む者と自らを位置づけ、そのような人は二つの言語の間を往来する喜びを持ちうる者、つまりは、概念的にも言語的にも人間の多能力性をのばす喜びを持ちうる者であると語る【Mora 1993: 1-14】。そのような位置にある人の状況を二〇〇の短編に書きこんでいるが【Mora 1993】、モラの本領が発揮される詩作に【Mora 1986, 1991, 1995】より端的にメキシコ文化の豊饒さを表現している。ウィチヨル（メキシコ西部の民族）神話、サン・クリストバル・デ・ラス・カサス（チアパス州の町）、ソル・フアナ・イネス・デ・ラ・クルス（一七世紀の女流詩人）、マヤの織手、オアハカ地方、コリド（物語詩）などメキシコにちなむ数々のイメージをテーマにしてモラが読んだ詩は、今はアメリカ人として暮らすメキシコ系の人々にとって豊かな文化のある別の世界への誘いであり救いでもあるろう。と同時に、モラは「リオ・グランデ河」や「ミグラ（国境警備隊）」のような詩を読み、激しい現実の世界へ読者の注意を惹くのである。

シスネロスもモラも各地の教育機関で教えたり、奨学金をえて創作活動に専念できる立場にいる。このような女性作家はメキシコへも自由に旅し、その社会と文化を複眼的に見ることが出来る人々であり、その文化を合衆国の生活状況に持ち込むことによるプラス面を感じとれる立場にある。このような存在としての自らの位置づけは一九九〇年代の多文化状況に支えられて可能となっているのだろうか。

自己の肯定的受容はニューメキシコ州ではより容易であった。そこでは一六世紀以来のスペイン系の人々の歴史があり、この人々の小説はイスパノ（スペイン系の人々）の小説もしくはニューメキシコ物として一つのジャンルを形成してきたからである。そして、九〇年代にはアナ・カステイリョやデニス・チャベス【Castillo 1994, Chavez 1994】とつた女性作家が活動し、まさにニューメキシコ物と称される小説世界を生みだしている。個性あふれる家族の肖像、イスパノ・インディアン・アングロの三民族文化共生の生活、ユーモアにみちた会話と語り

が特徴なのである。

カリフォルニア州では、女性作家の目はより現実的で闘争的である。

人類学・チカノ研究を専攻したメアリ・ヘレン・ボンセはセミナー・ペーパーを発展させて、三代にわたる家族の物語を自伝として発表した『Ponce 1993』。ボンセはカリフォルニア大学サンタ・バーバラ校で文学と創作を教えており、一九八七年には短編小説『Ponce 1987』を出版したが、これはチカノ小説というよりは、アメリカの現代小説とうけとれる。確かに各章の主人公はメキシコ系の人たちであり、描かれる生活にはメキシコ的なものがでてくるのであるが、人物の感受性、思考の流れ、問題となる生活の争点は実にアメリカンであり、筆致も現代アメリカ小説に近いように思われる。

右の印象をさらに深めるのがヘレナ・マリア・ビラモンテスの『イエスの足の下で』『Viramontes 1995』である。大手の出版社ベンギンの系列ダットンで出版の機会を与えられているだけあって、筆は簡潔で物語に社会性がある。文中にメキシコ文化とカトリックに由来するイメージとメタファーがでてくるが、それらがマイノリティ文化のネガティブなものではなく主人公を支える表象として現れ、貧者が生存のために闘う力を与える。

この小説は農業労働者の組合活動に身を捧げたセサル・チャベスに献じられており、カリフォルニアの農場生活が生きいきと描かれている。労働者の家族生活、農場での働き方、女性労働者の苦勞、子供の手伝い方、小型飛行機からまかれる農薬から身を守る方法などがはじめて私には理解できた。そして、その厳しいが美しい農場風景を背景にして物語は展開していく。

少女エステラは離婚した母親の家族とこの家族に寄り添うように暮らしている初老の男性に助けられながら暮らしている。農場で知り合ったテキサス州出身の青年アレーホに好意を抱くが、この青年は農場に散布された薬の害で病気になるてしまう。エステラたちは協力してアレーホをクリニクに連れていくが、手当を受けられない。そ

こで、クリニックの規則を無視して病院にまで病人を運び込む。車にガソリンは残り少なく、運を天に任してアレーホを病院に置いてくる。このエステラの「反乱」の後に、彼女は自分の心が力にあふれ、この世で迷った者みんなを自分の家へと呼びこむことができる、と感じはじめる。少女の社会正義への意識の目覚めの物語なのである。

日本でもサンドラ・シスネロスの小説がすでに二冊も翻訳され、近々、英文学者によりチカノ文学論集が訳出されることも聞いている。このジャンルが新しい世界文学の一部として受け入れられる日も近いような気がする。